

# 排水対策、雑草対策は万全に！

～ めざせ！ 収量270kg/10a以上 2等級以上比率60%超え ～

令和4年6月24日  
新発田農業普及指導センター

## この時期の管理ポイント

- 2回の中耕・培土が行えるよう、作業計画を早めに検討して、遅れず実施しましょう。
- 降雨が続く等、培土実施が困難な場合は、除草剤を利用して除草対策を徹底しましょう。
- 本格的な降雨に備えて、明渠の連結など排水対策を万全におきましょう。

## 1 中耕・培土

中耕・培土は、排水対策のほか、雑草防除や倒伏の防止など大豆の生育促進に極めて重要な作業です。収量と品質向上を図るため、適期に2回の中耕・培土が行えるよう作業計画を十分検討し、準備しておきましょう。

### (1) 中耕・培土の時期

作業適期は、土寄せによる生育抑制のおそれなくなる「播種後20日以降」から、「開花期頃」までとなります（表1、図1を参照）

表1【中耕・培土の適期】

管理作業	作業時期（大豆の生育から見て）	播種後日数
中耕培土1回目	本葉2枚目展開頃 主茎長12～15cmくらい	20～25日頃
中耕培土2回目	本葉5枚目展開頃 主茎長（地際から）20～30cmくらい	35～40日頃



図1【中耕・培土作業イメージ】

### (2) 中耕・培土の方法

- ① 培土1回目は子葉節まで、2回目は初生葉節まで土を寄せる。
- ② 2回目（最終培土時）の高さは15cm程度とする。
- ③ 株元まで土寄せされず、凹みができると水が溜まって湿害の原因になるので、株元までしっかりと覆う。
- ④ 培土で出来た溝は周囲明渠につなぐ。

第2複葉 本葉

第1複葉 本葉

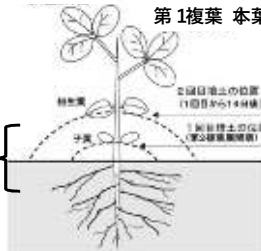


図2【培土の高さ】

土で覆われた茎の部分から新たに根が発生  
↓  
倒伏・湿害に強い大豆になります。

## 2 除草剤による雑草防除

大豆生育期の雑草対策は、「中耕・培土」の徹底が基本です。茎葉処理除草剤は中耕・培土で残った雑草対策の補助的手段として利用しましょう。

※降雨等で培土による除草対策が難しくなった場合は、臨機応変に生育期除草剤を活用し、雑草の取りこぼしを防ぎましょう。

### 【除草剤の使用例】(適用作物・大豆)

農薬名（成分名）	使用量・散布液量	使用方法	適用雑草・使用時期	使用回数	使用時期
ナブ乳剤 (セトキシン4)	使用量 150～200ml/10a 散布液量 100～150ℓ/10a	雑草茎葉 散布又は 全面散布	一年生イネ科雑草 (スズノカタビラを除く) 3～5葉期	1回	収穫30日 前まで
	使用量 200ml/10a 散布液量 100ℓ/10a		一年生イネ科雑草 (スズノカタビラを除く) 6～8葉期		
	使用量 250～300ml/10a 散布液量 100～150ℓ/10a		一年生イネ科雑草 (スズノカタビラを除く) 9～10葉期		
ポルトフロアブル (ネオノキップイフル)	使用量 200～300ml/10a 散布液量 50～100ℓ/10a	雑草茎葉 散布又は 全面散布	一年生イネ科雑草 (スズノカタビラを除く) 3～10葉期	1回	収穫30日 前まで
大豆ハザラン液剤 (ヘンタリナトリウム塩)	使用量 100～150ml/10a 散布液量 100ℓ/10a	雑草茎葉 散布又は 全面散布	一年生雑草 (イネ科除く) 大豆2葉期～開花期前 (雑草の生育初期～6葉期)	1回	収穫45日 前まで

### 【農薬使用にあたっての注意（当資料に掲載の農薬登録情報はR4.6.8現在）】

- 「農薬ラベル」に記載された「有効期限」「適用作物」「使用量・希釈倍率」「使用時期」「総使用回数」と「使用方法」を必ず使用前に自分で確認し、適正に使用する。
- 散布の際は周辺を確認し、飛散のないように努める。

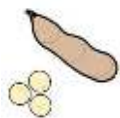
## 3 追肥

(1) 湿害により、葉の黄化や生育不良の症状が見られた場合は、生育回復のために、速効性肥料を追肥しましょう。なお、施用時は肥料ヤケに注意し、葉が乾いた状態で行いましょう。

肥料の種類	施用量 (N成分 kg/10a)	施用方法
速効性肥料 (尿素)	1.0～3.0	排水を促した後、畦間に追肥した後に培土する

(2) 低地力により収量が低い（実収200kg/10a以下）ほ場で栽培している場合は、ちりめんじわの発生軽減や収量確保のため、緩効性肥料を追肥しましょう。

肥料の種類	施用量 (N成分 kg/10a)	施用方法
緩効性肥料 (シフト型緩効性肥 原薬60日タイプ)	6.0	2回目の培土時（7月10日頃）に株元に条施し、培土により覆土 ※基肥に緩効性肥料を施用した場合は行わない



# 夏期の栽培管理と病害虫防除のポイント

令和4年7月5日  
新発田農業普及指導センター

～ 目標 収量270kg/10a以上！ 2等級以上比率60%超！ ～

## 夏期の管理ポイント

- 開花期までに、培土や除草剤で雑草対策を実施しましょう。
- 暗渠閉栓や畝間かん水等による、干ばつ対策を徹底しましょう。
- 開花期を把握し、基幹防除を適期に実施しましょう。  
特に「里のほほえみ」は、葉焼病やウコンノメイガの発生動向に注意し、適切に対応しましょう。

## 1 雑草対策

- (1) 培土作業  
培土は、開花期までに完了するように作業を進めましょう。  
開花期以降の作業は、断根・落花・落莢など生育へのダメージが大きくなりやすいので行わないようにしましょう。
- (2) 生育期除草剤の活用  
培土だけでは除草効果が不十分となった場合は、雑草の草種に応じた生育期除草剤で対応しましょう。
- (3) 難防除雑草対応  
難防除雑草（イヌホオズキ、ヨウシュヤマゴボウ、アサガオ類等）が発生しているほ場では、非選択性除草剤のうね間散布や手取りなどで対応しましょう。

## 2 干ばつ対策

- 【参考】干ばつの影響  
開花期から子実肥大初期に当たる7月下旬から8月下旬は、大豆の水分要求量が多く、干ばつ遭遇頻度が高くなります。干ばつ被害を受けると、落花、落莢が多くなり、莢数の減少、子実肥大への影響も大きく、収量・品質の低下を招きます。
- (1) 暗渠栓の管理  
地下水水位が60～70cm以下の排水の良いほ場では、干ばつ軽減のため、梅雨明け以降は暗渠栓を閉めましょう。ただし、降雨などにより、地下水水位が急激に上昇する場合は、開放してください。

- (2) 畝間かん水のめやす  
開花期以降に条間の土が白く乾き、最頂葉中央の小葉が50%以上反転した状態となった場合は（葉の観察は朝夕に行う）、畝間かん水を実施し、干ばつ対策を講じましょう（図1）。



図1 葉が反転した様子

## 3 病害虫防除対策

- (1) 葉焼病  
近年「里のほほえみ」で多く発生が見られる病害で、開花期頃に発病が認められる場合は収量や品質への影響があるので、防除が必要となります（図2）。
- (2) ウコンノメイガ  
播種時期が早いほ場や生育旺盛で葉色の濃いほ場で被害が多くなりやすく、幼虫による葉巻の発生初期が防除適期となるので、発生程度を確認して、防除要否の判断をしましょう（表1）。
- (3) 紫斑病・子実害虫（マメシクイガ、カメムシ類など）  
大豆子実に直接加害したり、着色粒を発生させたりして減収や品質低下の要因となりますので、基幹防除を実施しましょう。  
紫斑病は、開花期を把握し、防除を適期に実施しましょう（表2）。



図2 葉焼病の罹病葉

表1 ウコンノメイガ防除のめやす

時期	畝1m当たりの平均葉巻数
7月第5半旬	6個以上で防除
7月第6半旬	24個以上で防除



表2 基幹防除体系例

ほ場条件	防除時期	開花後3週間目頃 (8月上旬)	開花後4週間目頃 (8月中旬)	開花後5週間目頃 (8月下旬)	8月第6半旬～9月第1半旬
初作ほ場で、虫害の発生が少なめと予想されるほ場	粒剤体系	紫斑病防除	紫斑病防除	紫斑病防除	子実害虫防除
	液剤体系				
連作ほ場で、8月以降の虫害発生が多めと予想されるほ場	粒剤体系	紫斑病防除	紫斑病+子実害虫防除	紫斑病防除	子実害虫防除
	液剤体系				